

巻頭写真 サハリン最北端シュミット半島に分布するグイマツ林とエゾマツ林
Forests of *Picea jezoensis* and *Larix gmelinii* on the Shmidt Peninsula,
northernmost Sakhalin, Far East Russia

サハリン最北端のシュミット半島では、グイマツ林が優占するものの、斜面中部を中心に、エゾマツ林も比較的まとまって分布している。このエゾマツ林は北東アジア全体でも分布北限近くに位置する。シュミット半島で両タイプの森林構造や樹形を比較踏査することにより、両種の共存条件を検討することが可能だ。その結果から、最終氷期の北海道における両種の共存状態や、後氷期のグイマツの消滅要因も推察できるであろう。財団法人自然保護助成基金による「サハリン州シュミット半島の自然調査」への助成により、1998年6~7月にかけてシュミット半島を訪れ、森林植生を調査することができた。シュミット半島では、低湿地や台地上の凹地、台地下部にはグイマツ林(写真1)、台地の斜面から凸地、山地にかけてはエゾマツ林(写真2)が分布する。グイマツ林は最大樹高22mに達するが林冠は疎開し、林床にも十分に光が当たる。そのため林床にはハイマツ群落(時に群落高180cmに達する)が分布し、林分型としてはグイマツハイマツ林となっている。グイマツの樹形は、樹冠の広がりは大いだが(樹冠の直径は5m程度に達する)、樹木の上部にのみ樹冠が存在している。エゾマツ林も樹高25m程度に達し、北限近くに位置している割にはよく発達している。エゾマツの樹形は、樹冠の広がりが狭く(樹冠の直径はせいぜい3m程度)、縦に細長いロウソク型である。左写真の奥に見える樹木がエゾマツである。手前のグイマツと比較すると樹形の違いがよくわかる。分布北限近くのシュミット半島ではエゾマツの成長量は最小限近くにまで落ち込む。エゾマツが少ない成長量を維持するためには樹冠に光が十分に当たる必要がある。北緯50度以北の高緯度地域では、夏期、太陽が出ている時間が長く、太陽入射角は低く、斜めに差す。そのために、縦長の樹冠形をとるエゾマツには、樹冠全体に長時間光が当たる。そのことによりシュミット半島でもエゾマツ林が維持されていると考えられる。

(沖津 進 Susumu Okitsu)

